

松井今朝子

Matsui Kesako
Tatsumiya Gigoku

辰巳屋疑獄



松井今朝子

Matsui Kesako
Tatsumiya Gigoku

辰巳屋疑獄



松井今朝子(まつい・けさこ)

1953 年京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科演劇学専攻修士課程修了。松竹株式会社に入社、歌舞伎の企画・制作に携わる。松竹を退職後フリーとなり、故・武智鉄二氏に師事して歌舞伎の脚色・演出・評論などを手がける。また、『マンガ歌舞伎入門』(講談社α文庫)『びあ歌舞伎ワンダーランド』(ぴあ)など、歌舞伎紹介本の監修も行う。

97 年、『東洲しゃらくさし』(PHP 研究所)で小説家としてデビューし、同年『仲蔵狂乱』(講談社)で第 8 回時代小説大賞を受賞。以後『幕末あどれさん』(PHP 研究所)『奴の小万と呼ばれた女』(講談社)『一の富 並木拍子郎種取帳』(角川春樹事務所)『非道、行ずべからず』(マガジンハウス)などを発表している。

公式ホームページ <http://www.kesako.jp/>

辰巳屋疑獄

2003 年 11 月 5 日 初版第 1 刷発行

2004 年 2 月 20 日 初版第 2 刷発行

松井今朝子——著者

菊池明郎——発行者

株式会社筑摩書房——発行所

東京都台東区蔵前 2-5-3

振替 00160-8-4123

郵便番号 111-8755

明和印刷——印刷

鈴木製本所——製本

© Kesako Matsui 2003 Printed in Japan

ISBN 4-480-80373-4 C0093

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は下記へお願いいたします。

〒331-8507 さいたま市北区櫛引町 2-604 筑摩書房サービスセンター

TEL 048-651-0053

辰巳屋疑獄

目次

丁稚奉公

7

三代目の栄光

20

愚兄賢弟

32

焼け跡のなかから

51

掛屋指南かけやしなん

63

質屋転業

72

心を学ぶ

82

一家一門いつけいちもんの人びと

91

学堂始末

99

囲い者

109

手代総数四百六十人

115

遺言状

127

代判人だいはんにん

138

訴訟開始

151

勝訴の顛末てんまつ

161

京の夢大坂の夢

172

大樹の血

182

江戸の風

194

公事くじの蠅

203

大岡忠相ただすけの憂鬱

216

裁決の行方

227

湖畔の晩鐘

239

装幀 菊地信義

装画 吉川進「夏祭船渡御図」部分

大阪天満宮文化研究所編

『天神祭——火と水の都市祭礼』

(思文閣出版) より

辰巳屋疑獄

丁稚奉公

元助^{もとすけ}が世間というものと出会ったのは数えで十一歳。時に正徳六年（一七一六）、やがて享保元年に改まる年の春であつた。

生まれ育つた吹田村^{すいた}から向かつた先は大坂^{おおさか}で、元助を乗せた舟は落花に染められた淀川の水面を滑るように進んだ。舟には同じような年ごろの少年がほかに何人か乗っていて、いずれも日ごろの腕白ぶりはどこへやら、横に座つた親たちの膝^{ひざ}におとなしく手を置いて不安げな表情で行く手を見つめている。

大坂は川と橋の町である。天満橋^{てんまばし}、天神橋と大きな橋をふたつくぐつて舟は直角に向きを変え、東横堀川^{よこほりがわ}に入ると岸辺には土蔵の白壁がそそり立ち、がぜん通行人が多くなつた。とうとう着いてしまったという思いが少年たちをいっそう無口にさせていた。

川にはところどころに浜と呼ばれる舟着き場があつて、乗客はそこでつぎつぎと降りてゆく。舟は東横堀川からまたもや直角に折れて長堀川^{ながほりがわ}に入り、西の海へと向かいつつ丸太を山積みした多くの舟とすれちがう。難波^{なにわ}名所の四ツ橋を過ぎて、西横堀川へ曲がつたところで舟にはほかの乗客がいなくなつた。高窓からもうもうと白い水煙を吐きだす銅吹屋^{どうふきや}の前を通り過ぎて、木綿橋^{もめんばし}

が見えたあたりで元助父子はようやく舟を降りた。川に面して建ち並ぶ土蔵と納屋、どこまでも続く塀を前にして、ふたりはうろうろとあたりを見まわし、通りがかりの人にまず店の入り口をたずねなくてはならなかった。

農家の次男坊として生まれた元助に、丁稚奉公の話がもちあがったのは去年の暮れのことである。分け与えるほどの田畑がない農家の弟は、小前百姓の身で兄の居候として一生を送ることになる。それならいつそ町に出て商家に勤めたほうが将来に希望がもてる、と勧めたのは遠縁の男であつた。

その男はかつて同じ村に生まれ、大坂に働きに出て、今や自身で店を構えるまでに出世してゐた。黒羽二重の紋付羽織で家を訪れた相手は、薄汚れた野良着の父と兄にまず気おくれを感じさせた。母はすでに去年の夏、水あたりをこじらせてこの世を去つてゐた。

立派な身なりの男は自信たつぷりに説いた。

「あのまま田舎におれば、わしも一生汗水を垂らして働かねばならなんだ。店で十年も辛抱すれば、一廉の手代に引きあげられる。そこから先は己れの才覚と、運しだいじゃ。この子もきつとわしのように店がもてるようになるぞ」

男の語調は実に力強いものがあつた。気弱な親父はただただ圧倒されてゐた。

「可愛い子には旅をさせよという。なまじ親もとで育つと、わがままになるだけで将来ろくなことはない。幼い子を奉公に出すのは酷いように思うじゃろうが、田舎では商いの知恵づけが出来んよって、なるべく早う町に出したほうがええ」

男が奉公先として推奨したのは炭問屋である。炭は米と同様になくなくてはならないものであり、流行り廃りもないから商いとしては本道中の本道だという。

ガスや電気はおろか石炭、石油の使用がない時代、炭は最も質の高い燃料で、日常の暖房のみならず銅や鉄の精錬に不可欠である。この当時はことに精銅が日本最大の輸出品目とされ、銅を精錬する銅吹屋が大坂に集中していた。

「寄らば大樹の陰じゃ。同じ炭問屋でも大きな店に勤めるに越したことはない」

と、さらに男は大坂に十七軒ある炭問屋のうちで最大手と目される辰巳屋たつみやを奨めたのだ。

話に聞いていたものの、辰巳屋の宏壮な店構えはあらためて父子をたじろがせていた。遠縁の男は短い添状そえじょうをしたためたばかりで、付き添ってはくれなかった。

「ハハハ、寄らば大樹の陰じゃ。なあ、ぼんよ」

と、父は自らの不安を打ち消そうとして倅せがれの肩を抱き寄せる。もしわが子がうまくここにもぐり込めれば、まさに大樹の陰で一生を安泰に過ごせるのだと信じて、ここは勇気を振り絞るしかない。

おずおずと暖簾のれんをくぐり、見世庭みせにわと呼ばれる土間で添状を渡して、ふたりは広い板の間の隅で主人があらわれるのを待った。一軒の店に村総出のような大人数が立ち働くさまを見て、父はすっかりたまげてしまい、気おくれが高じてうつむくが、子は初めて見る商家の風景に心を奪われ、持ち前のくりつとした目玉をきよろきよろさせた。

小半刻こはんときほどして奥から人が出てきたとき、まわりが一斉にお辞儀をしたので父子は板の間に額

をこすりつけて平伏した。が、元助はあとになってそれが主人ではなく番頭のうちのひとりだったのを知ることになる。

短い挨拶のあと、父は年季証文に判を押させられ、それが済むと早々に追い返された。元助は門口に見送りに出ることも許されず、父から受け取った風呂敷包みひとつを抱え、年長の丁稚のあとについて店の奥にある急な段梯子だんばしを昇っていった。段梯子はいったん途切れて、少し離れたところからまた上に続くといったあんばいで、迷路のように入り組み、上にいくにつれどんどん幅が狭く、かつ急になる。

一番上まで昇りきって、きょうからここで寝るようにいわれた場所は、まだ幼い元助でさえまっすぐ立つのがやっという天井の低さで、縦に細長い屋根裏部屋だ。蓆むしろが敷かれた板の間は広さおよそ八畳分ほどもあろうか。小さな天窓から光りが射し込んで、折り重なった煎餅布団せんぺいぶだんの横に、自分と同じ年ごろの少年がひとりで座もんっているのが見えた。

「ここで大勢が寝てるさかい、遅う来た者はほかの者の邪魔にならんよう、段梯子のそばで寝え」

と案内役の丁稚はふたりに告げて、店にいる丁稚の人数を明かした。店は毎年春に新たな丁稚を迎え入れるが、ふたりは少し遅れて来たらしい。この屋根裏部屋と階下したの部屋で寝ている丁稚の数は併せると三十人ほど、成人の手代の数はさらに多いと聞かされて元助は何やらそら恐ろしくなった。

案内役の丁稚が階下に去ると、先に来ていた男の子が立ちあがり、こちらに向かってにっこり

と笑いかける。

「わては伊太郎や」

ほそおもて

子供ながらに細面の切れ長な目をしたはしっこそうな少年で、色が白くて見るからに町の子だ。髪もうしろで束ねただけの元助とはちがい、中剃りを入れた都会風の髪型である。

大坂の商家には元助のように近郊の農村から出てきた、いわゆる這出者と、伊太郎のように家業を継ぐまでの修業として丁稚奉公をする者がいる。いかにも町の子らしい早口で伊太郎に名を訊かれた元助は、「も、も、茂吉」と吃りがちに答えた。この時点で、元助はまだたしかに茂吉という名前だったのだ。

夕方になって大勢の丁稚がどやどや部屋に戻ってくると、狭い屋根裏部屋はむっと汗くさい、埃くさい臭いが立ちこめて息苦しくなった。先ほどの案内役がふたたびあらわれて、「これを着はこい」と投げだしたお仕着せは、河内木綿かわちもめん縞じまの洗い晒さらしで、裾すそはすり切れ、膝に継ぎが当たっていた。伊太郎はいまにも泣きそうな表情で、家からの晴れ着を脱いでそれに着替えた。

「そっちの子のあたまはちょっと直せばすむが、こっちはなんとかせんらん」

といいながら、いつの間にか年上の丁稚が剃刀かみそりを手にして元助の背後にまわっている。

どこの店でも奉公人は服装と髪型をきめられて、丁稚はたいがい中剃りを大きく入れた刈鬢くりびんにして前髪を残し、前髪は束ねてうしろに流すといった髪型だ。似たような髪型でも、主人の子供は束ねた前髪の裾を髷まげの元結もとゆいに結びつけ、奉公人は結ばせないなどして厳格に差別した。この夜、元助は水も満足につけてもらえずにぞりぞりと頭を剃られる痛みを堪えた。お古のお仕着せを着

せられて、髪型まで直された伊太郎は、ふくれっつらでしゅんとしていた。

十余人もの丁稚は八畳ほどの部屋に折り重なるようにして眠りに就いた。元助は大勢のいびきのやかましさと明日からの不安で、まんじりともせず一夜を過ごした。

朝まだ暗いうちから皆は起きだして、階下にぞろぞろと降りてゆき、新入りのふたりもあとに続いたが、まだどうしてよいやらわからず、広間の隅に突っ立ったままで初日の時はすみやかに流れていった。

「きょうは小ぼん様さんのお祝いじゃによって、ここを念入りに磨いておけよ」

と、板の間を雑巾がける丁稚らはさかんに鼓吹こすいされていた。

ぼんは少年の愛称だが、主人の息子はぼん様で、長男は兄あにぼん、次男は中なかぼん、末っ子は小ぼん様というふうに、当人が相当な年齢になっても呼ばれつづけるのが大坂の商家の習わしだ。この日辰巳屋では、十四歳になる三男坊が元服げんぷくを迎えた。首こうべに冠を戴き衣服を改めて成人を祝う元服の儀式は公家や武家からしだいに町家に及び、町家では少年の前髪さかやまを剃って月額さかやまをあらわすことや、嫁いだ娘が眉を剃って歯を黒く染めるのを元服というようになっていた。

ところで元助が奉公にあがった年の夏、年号は正徳から享保に変わり、秋にはいみじくも日本最良の炭の産地である紀州の藩主、徳川吉宗が八代將軍の位に就く。

もっとも商家の丁稚にとって幕府の將軍に当面だれがなろうと知ったことではなかったが、この日に元服した辰巳屋の三男坊とは初手から深い関わりを持つはめになる。幼名を久八といった少年は、元服を機に名を茂兵衛もへゑと改めて奉公人の前に姿をあらわした。

元助は大勢の奉公人が集う広間の隅で小ぼん様のご尊顔を拝していた。聞けば自分とわずか三つしかちがわないのに、元服した少年はひどく大人びて見えた。すました顔であたりを睥睨するようなふぜいは、年齢を超えて自分のはるか遠い彼方の人であることを幼な心に知らしめた。

前髪を剃って大きな頭鉢と秀でた額をあらわにした少年は、頬骨の張らぬさっぱりした顔立ちだ。子供ながらに鼻梁が通って、奥二重の小さな眼と薄い唇がきわめて伶俐な印象を与えた。

その小ぼん様が広間から姿を消して、ガヤガヤと一同が腰をあげにかかったとき、やおら小柄な男が前に飛びだして、つま先立ちの姿勢で「若いもんは、ちょっと待ちィ」と、男のわりに甲高い声を響かせた。新入りのふたりは前に呼びだされ、若い手代や先輩の丁稚らに改めてきちんと挨拶するよう命じられた。

「長堀平右衛門町の但馬屋から参りました。伊太郎でござりまする。皆様どうぞよろしく可愛がって下さりませ」

と、おないどしの子が先にこましゃくれた挨拶をしたあとに、元助はまたしてもうろたえながら「わ、わしは茂吉や」としかいえなかった。

辰巳屋では若い奉公人に「助」の字のつく呼び名を与え、ある程度の年齢になると「助」に代わって「兵衛」のつく呼び名にしていた。武家町家、身分の高下、自らが望むと望まぬにかかわらず、この時代の人は一生のあいだに名前をいくつも持つところ変える。小柄な男は伊太郎に「これからそなたは伊助じゃ」とすんなり呼び名を与えたが、元助が親からもらった名を聞いてウーンと思案の腕組みをした。茂吉が茂助になるまでにはいいが、年を取ると同世代の主家の

息子と名が重なるのは畏れ多いとしながら、男はハタと膝を打った。

「そや、きょうの日を祝うて、元助がええ」

かくしてひとりの少年が元服を機に茂兵衛を名乗ったがため、もうひとりの少年は思いも寄らぬ名を与えられることになったのだ。

「ええか、元助のモトは元服のゲン、いや、今はまだ元旦のガンというたほうがわかりやすいやろ。よう覚えときや」

元助の肩に手を置いてそう告げた小柄な男の名は宗兵衛という。

宗兵衛は浅黒い顔で額に太い皺が一本くっきりと刻まれている。眉毛が濃くて先がぴんとはねあがり、眼は鋭い刃物のような切れ長だ。分厚い唇が真横に大きく裂けているから、陰では「鰐口つあん」と呼ばれていた。黙っているときはそれをぐいとへの字に曲げたおっかない人相だが、そんな男が元助には目を細めて妙にやさしい表情を見せた。

「で、そなた、どこの村から来た？」

「吹田村や」

「ハハハ、そうか。わしといっしょで、やっぱり這出者か。はじめのうちは鈍くさいというて、町の子にさんざんばかにされるじゃろうが、田舎の子は辛抱強いのが取り柄じゃ。せいだい気張って働きや」

このときの男のやさしい声は長く元助の耳に留まった。宗兵衛はその後もよく元助のからだをつついて「どや、気張ってるか」だの「しっかりせんかい」などと声をかけてくれた。ふだんが